ヴィクトリア中期のイギリスにおける「登山」の創出

久保　利永子

はじめに

「趣味は登山です」。

今日であれば、この言葉はとくに補足説明がなくとも、その意味するところは理解されるだろう。「登山」は、野外スポーツの一ジャンルとして社会的価値を有しており、「登山」（mountaineering, climbing）という言葉も、特定の概念を示す用語として広く定着しているからである。では、こうした野外スポーツとしての「登山」は、いつ、一般概念として確立され、社会的に共有されるようになったのだろうか。日本国内の中高年の登山ブームや、エヴェレスト初登頂五〇周年が世界各地で祝われるような現状をみると、今日的な「登山」概念は、所与のものとして長らく人々の生活に受け入れられてきたかのように感じられる。人は、常に楽しみや達成感、勝利感のために山に登ってきたし、これからもそうだろうと、漠然と思いこんでしまいがちなのだ。しかし、案に反して、スポーツとして「登山」が誕生してから、まだ二世紀も経ていないのである。

「登山」は、一八五〇、六〇年代中期のイギリスにおいて成立したスポーツである。[1] しかし、それ以前から人々がアルプスに登っていたことは、改めて指摘するまでもないだろう。チューリッヒ大学のヨジアス・ジムラー（一五三〇―一五七六）が雪線を越えた場所での登山技術をまとめた著書を上梓したのは、一五七四年のことであった。[2] ジムラーの本には、安全確保のためのロープの使用方法や、氷河状のクレバスや雪崩といった様々な危険への注意や対処

方法などが記されている。ただし、ここで注意しておかなければならないのは、こうした本の読者対象として想定されていたのは、今日的な意味での「登山者」ではなかった点である。ジムラーの本は、狩猟や商業といった、なんらかのやむにやまれぬ理由からアルプス山中にわけいる必要のある人々を読者とするものであった。[3]

また、一八世紀末から一九世紀中頃までにアルプスに登った人々のなかには、多くの「科学研究者」が含まれていたことも忘れてはならない。たとえば、ジュネーヴの自然哲学者オーラス・ベネディクト・ソシュールは一八七八年にモンブランに登頂しているが、その目的は山頂での科学実験であった。その数日後にモンブランに登頂したイギリス人のマーク・ボーフォイ大佐も、やはり山頂で科学実験を行ない、帰国後はロイヤル・ソサエティでその成果を報告している。[4] 一九世紀前半にアルプスを渉猟し、同時代の、そして一九世紀中期のイギリス人のアルプス登山に大きな影響を与えたJ・D・フォーブス（一八〇九―一八六八）も、科学者であった。フォーブスは、スイスのルイ・アガシ同様、氷河の運動メカニズムの観測・分析を行なうため、積極的にアルプスの山に登っている。

このように、一八五〇年代以前にも、アルプスに人々が登っていた記録は枚挙にいとまがない。こうした状況を確認すると、必然的に一つの疑問が生じてくる。それ以前から人々が山に登っていたのであれば、なぜ、ほかでもない一九世紀中期を「スポーツとしての登山」の成立期と主張することが可能になるのだろうか。

従来の研究では、スポーツとしての「登山」の成立は、以下の二点、すなわち（一）ロマン主義の影響による自然観の変化[5]（内的要因）、（二）鉄道に代表される交通網の発達（外的要因）、に基づいて説明されてきた。また、その成立指標は、「山に登る」という行為に期待される機能や、そこに見出される価値観の転換に求められてきている。なんらかの目的達成のための「手段としての山登り」から、「山に登る行為や登頂そのものを目的とする山登り」への転換である。しかし、このような成立要因・指標は、妥当なものとは言い難い。上記二点の成立要因はあくまでも間接的なものにすぎず、また、「自己目的化」とでも言うべき成立指標も、現実に則したものとはいえないからである。[6] では、一九世紀中期を登山の成立期とするのが誤りかというと、そうではない。たしかに、一八五〇、六〇年代のイ

ギリスにおいて、登山は「スポーツ」として成立したといえるのである。

一九世紀前半までのイギリスでは、「アルプス登山」は、科学実験やシャモア猟といった、なんらかの目的を遂行するための「手段としての山登り」が主流であった。それが当時の一般的な「登山」の概念だったのである。しかし、一八五〇年代に入ると、ある特定の人々、すなわち登山愛好者たちが、従来のものとは異なる「登山」概念を明確に主張し始める。

一八五九年一〇月の『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』（以下、『ブラックウッズ』）掲載の「登山―アルパイン・クラブ」は、[7]こう主張する。「男らしさという価値観をアルプスという舞台で表現する登山こそ、今、イギリスで切望される新しいスポーツに他ならない」[8]（強調引用者）。このような言説は、それ以前とは異なる新しい「登山」概念、すなわち「スポーツとしての登山」という認識の出現を示唆するものであった。イギリスの人々が、「アルプスの山に登る行為」を、それ以前とは異なる文脈で認識するようになったのが、まさしく一九世紀中期であったのだ。この時期に、登山ははじめて「スポーツ」という位置付けを明確に与えられるようになるのである。

「登山」という言葉が、「山に登って降りてくること」という、たんなる地理的移動や身体活動をさすのではなく、そこに精神的な何か、抽象的な何かを期待し、投影し、獲得するための行為として理解されるようになること、そしてこのような認識に対する社会的承認が確立されること、この変化こそが、登山の「成立」として理解されるべき現象なのである。現実の山中での実践や、そこで達成された記録のみを統計的・通時的に数値化したとしても、その成立過程の解明は不可能だろう。それがいかに「語られたか」という言説分析ぬきに、人の認識の変化を把握することはきわめて困難だからである。「登山の成立」とは、「これが登山である」、「それは登山ではない」といった人々の意見の応酬から浮かび上がる、新しいスポーツとしての登山概念がイギリス社会において認識された、そのプロセスをさすのである。このため、本稿では、一八五〇年代末にイギリス社会において主張された新しい「登山」概念の解明を試みたい。そうした新しい概念は、誰が、どのようにして、誰にむかって発信したものであったのか。あるいは、なぜ、こうした主張がなされねばならなかったのだろうか。そし

て、そのような「登山」概念は、どのように受け止められたのだろうか。

第一節　「登山文学」の成立

ロンドンに本拠地をおく英国山岳会（アルパイン・クラブ）（以下ＡＣ）の初代会長ジョン・ボールは、一八五九年に次のように述べている。「アルプスは他国の人々にとって、強力な魅力を放ち続けてきた。…（中略）…アルプスには、他では見られない素晴らしい組み合わせ、すなわち、雪に覆われた峰や氷河といった崇高な景観と、湖や谷間のやわらかな美のとりあわせが存在するからである[9]」。アルプスの美に惹きつけられたイギリス人は、過去においても現在においても多く存在する、とボールは言う[10]。しかし、アルプスの楽しみ方そのものには時代と共に変化が生じていた。ボールによれば、以前は主として既存のコースをたどり、山岳美を鑑賞することがアルプス滞在の主要な目的であったのが、今では「これまで人があまり訪れたことのない場所への関心が高まってきている。そのような関心の高まりは、近年、数多く出版されているアルプス文学[11]の隆盛を見ると明らかであろう[12]」。

たしかに、ボールが指摘するように一八五〇年代には登山経験をつづった書物が相次いで出版されている。たとえば、アルフレッド・ウィルスによる『アルプス逍遥』（一八五六年）[13]、トマス・Ｗ・ヒンチリフの『アルプスの夏』（一八五七年）[14]などは、いずれもＡＣによる出版活動開始以前の「登山文学」として、ほとんどつねに言及される代表的な「アルプス文学」であった[15]。一八五〇年代末に出版された、このような登山文学の中でも、登山史においてこれまでとくに注目されてきたのは、ウィルスの『アルプス逍遥』である。アルプス登山の成立期、すなわち、登山の「黄金時代」は、ウィルスのヴェッターホルン登頂（一八五四年）に始まり、ウィンパーのマッターホルン初登頂（一八六五年）に終るとされている[16]。黄金時代の開始を告げたヴェッターホルン登山が、そもそも当事者や登山愛好者以外のみならず、一般的に知られるようになったのは、『アルプス逍遥』の出版に負うところが大きい。この本は、複数の書評で取上げられ、登山愛好者だけでなく、アルプスに関心をもつ一般読者にも広く読まれたからである。本稿で主要な考察対象とするのは、アルパイン・クラブ初の

出版物『峰、峠、氷河』（第一輯）（以下、ＰＰＧ・1と略）が提示する登山像とそれに対する社会の反応であるが、その前に、ＰＰＧ・1以前に出版された「登山文学」について、ウィルスの著作を例に、簡単に紹介し、こうした文学とＰＰＧ・1との関係を確認しておきたい。

ウィルスによれば、『アルプス逍遥』の執筆動機は次の二点、すなわち「アルプス地方のなかでも標高が比較的高く、どちらかというと近づきにくい地域のすばらしさを紹介すること」、および「シャモニやインターラーケンといった町のすぐ近く、旅行者たちのほんの目と鼻の先にある、より興味深いエクスカーションの機会を提示すること」であった。このような意図に基づいて執筆された『アルプス逍遥』に対する評価はどのようなものだったのだろうか。まずは簡単に、ポイントとなるウィルスの『アルプス逍遥』の内容を確認しておきたい。

たしかに、登山愛好者であるウィルスの面目躍如といった趣の、コル・デュ・ジュアン登山（第一章）や、ヴェッターホルン登頂（第十四章）のような、登山報告的な記述がこの本全体に占める比重は大きい。しかし、この本が、本格的な登山のみをテーマとしたものではないことは、上記のウィルスの執筆動機や、本の内容から明らかとなる。たとえば第二章「メール・ド・グラースの一夜、あるレディの『お花畑』遊覧」は、本格的な登山とは異なる種類のアルプス旅行の一こまを描写したものであった。章タイトルから推測されるように、この章は、一八五四年に、ウィルスが「あるレディ」をエスコートして、モンタンヴェールからメール・ド・グラースに向かい、この有名な氷河のそばの大岩の陰で一泊し、日の出を見たあと、天然の「お花畑」を経由してシャモニへ下る一泊二日のエクスカーションの記録である。この夏、ウィルスは新婚旅行中で、天然のお花畑を楽しんだ「レディ」とは、結婚したばかりの彼の妻ルーシーのことであった。

ルーシー・ウィルスは、「健康ではあるが、とりたてて健脚というわけではない」[17]、言わば普通のミドルクラスの女性であった。そんな彼女のための「遠足」を記した第二章は、本格的な登山に関する他の章とは趣の異なるものとなった。この遠足は、当時のアルプス旅行の通例であったエクスカーションの範疇からはやや踏み出しているが、しかし、完全にそこから乖離したわけではない。それは、身体健康な成人であれば、いくらか余分な経済的・時間的余

裕があれば実行可能なものであった。こうしたことから、「お花畑遊覧」はウィルス個人の幸せな記録というだけでなく、旅先の自由を楽しみつつも、ミドルクラスの女性がその体面や品位を傷つけることなく実行できるエクスカーションのひとつのあり方を読者に提示する役割を果たしたということができるだろう。

こうした内容の『アルプス逍遥』を、『ナショナル・レビュー』は、「ブック・クラブに適した近刊書」欄でとりあげている。その推薦理由は、「読んで楽しめるスイス旅行の記録というだけでなく、これからスイスを訪れる予定の人々にとって有益な情報を豊富に掲載している」[18]というものであった。この本に対する評価のポイントは、以下の二点である。第一に、この本は、アルプス登山を主要テーマとしているが、同時に、本格的な登山愛好者でなくとも楽しめるような構成になっている。第二に、この本は、ひとひねり加えた楽しみ方を提案する、優れた旅行案内書である、という二点である。このことからも、『アルプス逍遥』は、登山愛好家に限らず、より広範囲の人々に読まれるべき「アルプス文学」の一冊として位置付けられていたことが理解される。

こうした『アルプス逍遥』の販売実績は好調で、一八五九年には第二版（増補改訂版）が出版されている。[19] 初版と第二版の主な違いは、モンブラン登山の章が新たに追加されたこと、「徒歩旅行者への提言」と題した章が巻末の補遺に組み込まれたこと、地図が三枚添付されたこと、の三点である。一八五〇年代のイギリスでは、モンブラン登山についてはよく知られていたため、[20] 新しい章の追加はとくに新奇なものを同書に付加するものではなかった。では、このような増補改訂をほどこした第二版に対する評価と、初版の評価に違いはあったのだろうか。第二版への書評を手がかりに、同書の初版と第二版に対する評価や位置付けに変化が確認されるかどうか、変化が生じているならば、それはどのようなものか、確認してみたい。

『アルプス逍遥』（第二版）は、たとえば『フレイザーズ・マガジン』の書評に、他の数冊の「アルプス文学」とともに取り上げられている。評者は、この本を当該地域に関する「地誌情報をより多く伝える本」とし、著者ウィルスは「疲れ知らずの登山家」であるが、それほど身体的に頑強ではない読者への気配りを忘れず、登山愛好家でなくとも楽しめるような「多くのエクスカーションも提案して

いる」と紹介する。[21]『アルプス逍遥』は、いずれも訪れる人の比較的少ない地域での旅行・登山の記述が中心となっているため、その土地の様子の描写は自然と「地誌情報を伝える」ものとなることは容易に理解されるだろう。また、「多くのエクスカーションを提案」という部分は、初版に対する評価と共通のものである。

しかし、そうした性質を認めつつも、この評者が強調するのは、『アルプス逍遥』の大部分を占めるのは、「より重要な遠征についての記述[22]」という点である。ここで言う「重要な遠征」とは、たとえば「コル・デュ・ジュアンや、フィンデルン氷河経由でサースからツェルマットへの行程」といった本格的な登山についての記録である。『アルプス逍遥』は、第一義的に「遠征」について書かれた本として紹介されており、エクスカーションに関する部分は、あくまでも付随的な要素として言及されるに過ぎない。『アルプス逍遥』は、なによりもまず登山を語る書物なのだ。第二版に対するこのような位置づけは、『フレイザーズ・マガジン』一誌に特有のものではなかった。

同様の見解を示すものとして、たとえば、マレーの『スイス案内』（一八六一年版）が挙げられる。マレーの『案内』シリーズは、当時イギリス人のバイブルと称されるほどの人気を誇った旅行案内書であった。『スイス案内』は、「スイスに関して、もっとも注目すべき事柄」と題するコラム[23]でアルプス関連図書とりあげ、「一般的なレベルの体力・能力の旅行者」、「より困難で冒険的な探検者」と、読者対象を二つに区分して、それぞれに適した本を数冊紹介している。前者のカテゴリに対しては、『あるレディのモンテローザ周遊』（一八五九年）[24]、S・W・キングの『ペナイン・アルプスのイタリアの谷間』（一八五八年）[25]といった、風景や文学的趣味を中心とした従来型のアルプス旅行文学が紹介された。一方、後者への推薦図書として紹介されたのは、『アルプス逍遥』とT・W・ヒンチリフの『アルプスの夏』であった。[26]

『アルプス逍遥』は、初版出版時には、マレーが示した二つのカテゴリ双方の読者がそれぞれの立場から楽しめる本として紹介されていたが、ここでは、本格的登山愛好者向けの書物という位置付けがなされている。しかし、既に確認したように、初版と第二版の間には、内容・構成ともに大きな相違はない。第二版における変更点は既に述べた三点のみであり、妻を伴った一泊二日の遠足といった様々

な「エクスカーション」に関する部分が削除されたわけでもない。したがって、初版と第二版の位置付けの変化要因は、『アルプス逍遥』の内容ではなく、他に求められるべきだろう。このような変化をもたらした外的要因とはどのようなものだったのだろうか。

一八五〇年代後半のイギリスでは、アルプス登山に関して注目すべき二つの事柄が生じていた。アルパイン・クラブの設立（一八五七年）とPPG・1の出版（一八五九年）である。ウィルスはACの設立準備段階から中心的なメンバーとして活躍しており、PPG・1の巻頭を飾ったのも、彼の登山報告であった。[27]『アルプス逍遥』の初版はAC設立の前年に、第二版はPPG・1と同年に出版されていることに注意を喚起したい。ACは、私的で登山愛好者の小さな集まりとして発足したものであるが、その存在が広く社会的認識を獲得するまでには時間はかからなかった。社会的認知度の高いACの存在とその出版活動は、「登山を語る文学」に対する社会的認識・評価にも影響を与えずにはおかないものであった。PPG・1刊行直後から、『アルプス逍遥』や『アルプスの夏』のような、いわば「AC以前」ともいうべき、登山をあつかったアルプス文学も、「登山文学」というサブジャンルに属する本として明確に意識されるようになるのである。この傾向は、各種新聞、雑誌などに掲載された複数の書評からも容易に確認される。こうした変化は、いわば、「本格的な登山の記述も含む旅行文学」から「エクスカーションの記述も含む登山文学」へと、登山を語る本に対する社会認識が変化したことを示唆するものといえるだろう。『アルプス逍遥』の位置づけの変化は、まさにこの、PPG・1を基準とする「登山文学」という認識枠の出現を伝える例なのである。

こうした指摘が妥当性を持つためには、実際にPPG・1が「登山文学」の雛形として社会的認識を獲得していたことが確認されなければならない。そのためには、この本が、登山概念発信の装置として、社会から認められていたかどうか、そこで提示された「登山」像や「登山者」のイメージが、どのようなものであったか、こうした概念にイギリス社会がどのような反応を見せたかが、明らかにされる必要がある。まずはPPG・1の登山情報発信装置としての側面に注目してみたい。

第二節　『峰、峠、氷河』（第一輯）の出版

同好の士の集まりであるACは、その設立主旨の一つとして、「趣味を同じくするものの交流・連帯の促進」を掲げており、その構成員も、最初は「少数の登山家のための懇親会のようなものになるだろう」と考えていたことを想起すると、[28] ACが会員間の情報共有手段として「会員による、会員のための登山情報誌」の発行を計画したとしても、それは自然なものとして理解されたことだろう。しかし、実際に彼らが考えていたのは、そのような出版活動ではなかった。AC初の刊行物PPG・1が読者ターゲットとして想定していたのは、会員以外の「一般の人々」[29]だったのである。

PPG・1の序文で、会長のボールは、まずはアルプスの魅力や健康や余暇のためのアルプス旅行が、「イギリス人の間では性別を問わず習慣化してきている」[30]状況に言及し、次いでPPG・1の出版団体であるACの設立経緯やその目的、会員の活動などの簡単な見取り図を示したあとで、PPG・1の刊行に至る経緯を説明する。とくに注意を喚起したいのは、この本は、AC会員の間で既に共有されている記録の中から「一般読者の関心に訴えそうなもの」[31]を選んで編纂したとボールが強調している点である。しかし、そもそもなぜ、ACという特定の趣味団体の会員活動報告集が一般読者にむけて出版されなければならなかったのだろうか。

あくまでも私的で小規模の趣味団体にすぎないACが、会員の活動報告集を一般向けの書物として出版した背景としては、一九世紀半ばのアルプス文学に対するイギリス社会の関心の高さも考慮されるべきだろう。しかし、より直接的な理由としては、印刷媒体こそ、彼らの目的を効率的に達成する最高の道具であったことが挙げられる。一八五〇年代末のACは、世界で唯一の登山愛好者の団体であった。彼らは、「スポーツとしてのアルプス登山」という新しい「登山」概念を社会に向かって、すみやかに発信する必要があったのである。登山というスポーツに対する社会的承認の獲得が重要であったのは、彼らの愛好するスポーツが、ジェントルマンにふさわしいスポーツとして社会的に承認されることが、AC会員をはじめとする登山者にとって、非常に切実な意味を持っていたからである。[32] 一九世紀中期の登山者は、その圧倒的多数が中層ミドルクラスに

属する人々であった。当時のイギリスでは、経済的な豊かさを手にしたとしても、社会的尊敬を勝ち取ることはできなかった。社会的尊敬を得られなければ、ただの成り上がり者ということになってしまうが、ミドルクラスとしては、そのようなレッテルはなんとしても避けるべきものである。このため、彼らにとっては、自分と同等、あるいは自分より上位の社会集団によって認められることが肝要となり、その行動は、勢い、他者の目を気にしたものとならざるをえない。

そのようなミドルクラスのアイデンティティを理解するキーワードが、「リスペクタビリティ」という価値判断基準であった。リスペクタビリティとは、「社会から敬意をはらわれうる」こと、あるいは「ジェントルマンにふさわしい」ことを意味するものであり、その獲得の試みは、ミドルクラスの人々により、さまざまな形で具体化され、実践されていた。スポーツはこうしたジェントルマン化の社会的道具立ての一つであった。社会階級としてはミドルクラスに属するＡＣ会員らにとって、「登山」がリスペクタブルなスポーツとして社会的に承認されることが必要であったのは、それが、彼ら自身がリスペクタブルな存在、すなわちジェントルマンとして社会的尊敬を勝ち取るための手段のひとつだったからである。このため、彼らが提示する登山像に対して、誰の共感を獲得すべきか、そのためにはどうすればよいのか、という問題はきわめて重要な意味を持った。望ましい登山像、すなわち社会的に尊敬されるような、つまりはリスペクタブルなスポーツとしての「登山」像は、誤解されることなく、変質させられることなく、受け手として望ましい人々に効率的に伝達されなければならなかったのである。

すでに言及したウィルスやヒンチリフの著書をめぐる状況が示唆するように、一八五〇年代のイギリスでは、本格的なアルプス登山についてのナラティヴはさまざまな印刷物の形で社会に受け入れられていた。そのような状況にあって、ＡＣが「一般の読者」に対し活動報告集を出版したことの重要性は、それがなによりもまず、複数の登山者による一つの登山概念の提示であったことにある。ＰＰＧ・１は定期刊行物や、個人の旅行記に単発で発表されるばらばらの登山経験の描写とは異なり、世界で唯一の登山者による登山者のための団体が、本格的な「登山」をテーマとして編纂した書物であった。それは、「登山」という新し

いスポーツの存在を明確に印象づけ、その活動内容や担い手についての情報を社会に広く発信するための道具であった。PPG・1の出版は、それ以前は単発的であったアルプス登山の情報発信の核の出現を可視化する出来事だったのである。人々は、この本を通して、ACが目指す登山のありかた、すなわち「登山とはどうあるべきか」、「登山とはどのようなものか」という「登山」の定義を理解し、「登山者」という集団的アイデンティティを読みとることになる。

印刷物が世論形成に果たす役割を想起すれば、PPG・1の出版が、ACに代表される登山者たちが構築した新しいスポーツ概念を広め、登山に対する社会的承認の獲得を確実なものとするための戦略的な意図がこめられた行為であったことは、容易に理解されるだろう。PPG・1には、いわば「啓蒙書」としての役割を強く期待されていたのである。初版の序文のみならず、再版されるたびに追加される各版への序文において、ボールは繰り返し一般読者の登山に対する関心の高さに言及する。これは単に事実確認をするだけでなく、一般読者が、さらにいえばイギリスの世論が、PPG・1が提示した登山を肯定的に受けとめていることを、新しい読者に印象づけるためのレトリックでもあったのだろう。

では、ACが発信した情報の受け手、すなわちPPG・1の読者層として想定されていた「一般の人々」とは、実際にはどのような人々であったのだろうか。このことは、ACがイギリス社会のどの階層に「新しい登山」概念に対する承認を期待していたのかという問題と直結する問いである。PPG・1がどのような本として出版されたかを確認することによって、この問いに対する答がえられるだろう。

PPG・1の出版社は、大手の老舗出版社（一七二四年創業）のロングマン社であった。[33] PPG・1は、この社会的評価の高い出版社から世に送り出され、その書誌情報は同社の出版カタログ[34]や、同社刊の本の巻末に収録された出版目録に掲載されている。本文・補遺五三二頁に加え、多色石版刷りの挿絵八枚、地図九枚、木版画および図二三枚を収録したPPG・1は、クロス装幀で高さ二一センチ、表紙は金で雪壁を登る登山者の絵が型押しされており、価格は二一シリングであった。読者層の特定の一助となるため、ここでは、二一シリングという本の価格に注目した

い。

この価格は、当時の小説三巻本の標準価格三一シリング六ペンスに比べるとたしかに安いが、本一冊の値段としては、決して安価なものではない。一八四二年の開店以来、一九世紀を通じて突出した顧客数と、とくに小説分野での強大な影響力を誇ったミューディ貸本屋（以下、ミューディ）の会費が一ギニー（二一シリング）であった。[35] 他の貸本屋に比べ破格の安値であったとはいえ、それは誰にとっても気軽に支払える金額ではない。[36] ミューディの顧客がおもに中層から上層ミドルクラスにより構成されていた理由のひとつは、この会費に求められる。一ギニーの会費は、それ以下の階層の人々にとっては、決して安いものではなかったからである。

ＰＰＧ・１一冊の値段が、貸本屋の年間利用料に相当したという事実は、何を示唆するだろうか。仮に、ＡＣが階級を問わず、ただひたすらに一人でも多くの読者獲得をめざしていたのであれば、二一シリングという値段は明らかに目的達成の障壁となったことだろう。しかし、ＡＣはそのようなことは望んでおらず、この売価は、むしろ好都合であった。登山が、ジェントルマンにふさわしいスポーツとして認められるためには、このスポーツが、自分たちと同等かそれ以上の階層の人々によってリスペクタブルな余暇活動として明確に承認される必要があり、同時に、望ましくない人々、すなわち自分たちより低い階層の人々を排除する必要があったからである。また、ＰＰＧ・１がミューディの貸本レパートリーの一冊として選ばれていることも、[37] 読者の特定化に有効に働いたことだろう。一冊二一シリングという値段や、社会的評価の高い貸本屋に受け入れられたという事実は、実質的に読者層の限定を左右したであろうこと、また、その結果はＡＣにとって望ましいものであったことが理解される。

価格設定などを通じて、ある本に対する読者層の特定化を試みることは可能だろう。しかし、その本が読者ターゲットとする階層に実際に受け入れられるかどうかは、また別の問題である。ＰＰＧ・１は予定通りの読者層に受け入れられたのだろうか。この点については、ＰＰＧ・１の売れ行きと、同時代の書評におけるＰＰＧ・１の評価が理解の手がかりとなるだろう。

第三節　『峰、峠、氷河』（第一輯）に対する社会的評価

既に確認したように、ＰＰＧ・１は安い本ではなかった。しかし、「一ギニーという値段にも関わらず、その人気は非常に高い」[38]という状況に鑑みて、『ロンドン・ランセット』は、ＰＰＧ・１の初版刊行から数ヶ月も経たないうちに第二版が出版されたことを当然のことと見なしている。[39]初版出版後、半年以内に第四版までが完売したという事実も、その人気のほどを伺わせる。[40]「一冊で一二冊分の価値がある」[41]と評されたＰＰＧ・１が示した好調な売れ行きには、内的要因と外的要因が想定される。

内的要因とは、ＰＰＧ・１の内容が当時のイギリス読者層のニーズに合致していたことを指す。『ロンドン・ランセット』は、この本の人気の秘密の一端は、「とくにわれわれの同国人にとって魅力的なもの」、つまりアルプスの高峰が舞台であることに求めている。[42]『ユニヴァーサル・レビュー』は、アルプス登山への関心がますます高まる昨今、「アルパイン・クラブ会員の活動成果が一冊の書物にまとめられて然るべき」という社会的要求の高まりを妥当なものと述べた。[43]この見解は、ＡＣこそ、アルプス登山のなんたるかを示す存在であるという認識が、一八五〇年代末には既にイギリス社会において浸透していたことを示唆するものだろう。ＡＣは「アルプスの中でも標高が高く、もっとも人が訪れることのない地域に、誰よりも親しんでいる人々」[44]の団体であるからこそ、その会員がもたらす情報は、登山に関心を持つ人々にとって、興味深くまた有益なものとなると見なされていたのだ。

ＰＰＧ・１の人気を高めた主な外的要因としては、これがロングマン社から刊行されたことと、大手貸本屋で扱われていたこと、複数の定期刊行物で好意的に取り上げられたという三点を指摘しておきたい。ＰＰＧ・１はロングマン社から刊行されたことで、同社の他の出版物とともにこの大手出版社の出版目録にリストアップされている。[45]先述のように、大手貸本屋も、ＰＰＧ・１を貸本リストに加えている。さらには、各種の書評において肯定的な評価を受けたことも、この本に対する読者層の関心をかき立てる効果があっただろう。では、こうして出版・販売されたＰＰＧ・１は、実際に人々の期待に応えうるものとなっていたのだろうか。

『ユニヴァーサル・レビュー』は、書評にPPG・1を取り上げた理由として次の二点をあげている。アルプス人気とそれに対するACの影響力の大きさを考慮すると、ACによる初の出版物に注意を向けないわけにはいかないこと、PPG・1の読み物としての魅力を考えると、やはりこの本を看過するわけにいかないこと[46]、という二点である。PPG・1の「読み物」としての魅力については、『ナショナル・レビュー』も言及している。同誌は、興味深い旅行記録を読む楽しみと、読書を通じた知識の習得が同時に期待できる本として、PPG・1に対し積極的な評価を与えた[47]。このような評価は、同時代の他の書評にも共通のものであった。たとえば、地質学的興味をもつアマチュア向けの月刊誌『地質学者（ジオロジスト）』は、PPG・1を「多くの景色、出来事、そしてそれについての記述」を含む「魅力的な一冊」と呼んだ[48]。『ジオロジスト』によれば、この本は「一般読者に喜びをもたらす」ような「優れた趣のある本」であるため、興味深く有益な読書体験が約束される[49]。さらに評者は「とくに多くの読者に読まれることを」希望しつつ、同時に「第二版を求める声が既に挙がっていることに喜びを感じる」と、再版によるさらなる読者層の広がりを期待する言葉を添えている。他にも、「実際に休暇を山で過ごすつもりの人にも、一、二時間ばかりアルパイン・クラブの会員の活動をたどり、楽しくかつ有益な時間を過ごすだけで満足という人にも同様に、この本を心から推薦する」[50]（『メディカル・タイムズ・アンド・ガゼット』）、「誰もが心から楽しめるよみもの」[51]（『チェインバーズ・ジャーナル』）、「挿絵も大変美しく、地図も素晴らしい。この本は見事に魅力的に作られているため、初版刊行後数週間で、すぐに新版を求める声が挙がったことにも驚きを感じない」（『ベントレーズ・クォータリー・レビュー』[52]）というように、同時代のいずれの書評においてもPPG・1はきわめて高く評価されていた。

こうした書評の文言に加えて、この本が数ヶ月に一度再版されたという事実によっても、PPG・1が読者の期待に十二分に応えていたことが確認される。PPG・1は、五月の初版刊行から年内に第四版まで順調に版を重ねた。初版から第四版までの変化としては、各版の序文が「初版への序文」前後（版によって異なる）に挿入されたこと、テキストや地図に関して、いくつかの訂正が行なわれこの二点のみであり、内容や構成には変更はない。このため、

新版が出ても、先に確認したような肯定的な評価に変化は見られなかった。

好意的な書評という追い風をうけ、順調に版を重ねたＰＰＧ・１であるが、不満や要望の声が聞かれなかったわけではない。たとえば、『ユニヴァーサル・レビュー』は、ＰＰＧ・１に収録された地図と本について改善の余地があると述べている[53]。当時は、サルディニア政府作成の地図を含め、モンブラン山系に関しては満足な地図は存在しなかった。少なくとも一般の人々が入手可能な、正確な地図は販売されていなかった。同誌はこうした状況のため、ＰＰＧ・１に掲載された当該地域の地図の正確さを高く評価するものの、実際の旅行で頼りにするにはあまりにも小さすぎると不満を述べ、なんらかの対応を促している。

また、同誌は、ＰＰＧ・１のサイズと値段についても、改善を要求した。ＰＰＧ・１は内容に関して言えば、アルプス登山者にとって最良の旅行の友となりうる本であるが、そのサイズと値段に関しては、おおいに問題を抱えた本であった。厚みのあるハードカバーのＰＰＧ・１は、重くかさばるだけでなく、高価であるため、書斎で読むには適しても、旅行中に気軽にナップサックに入れて持ち歩くにはなんとも不適切な本である。こうした問題点を解決するために、よりコンパクトで安い版の出版が真剣に検討されるべきではないだろうか。これが、同誌の指摘の第二点目であった。

こうした消費側のニーズについては、出版者側も注目していた。たとえば、ＰＰＧ・１収録の地図はすぐに別個に、本文から独立した形で販売が開始される[54]。ＰＰＧ・１収録の地図のうち、スイス・アルプスの地図八枚を一組とし、これにアルプスの山の標高表を加えた地図セットは三シリング六ペンス[55]で販売された。これ以後、ＡＣによる登山文学の発信と並行して、地図作成・出版も、継続されていくことになる。たとえば、一八六二年に刊行された『峰、峠、氷河』（第二輯）（以下、ＰＰＧ・２）には、地図（大四枚、小一〇枚）が収録されていたが、この地図とＰＰＧ・１の地図をあわせて一冊の地図帳として編纂したものが、『アルプス地方の地図[56]』（地図一九枚を収録）として出版された。こちらの値段は、七シリング六ペンスであった。このように、ＡＣが作成した地図に対する社会的需要が一九世紀中期のイギリスにはたしかに存在したこと、地図出版は商業的にも成功であったことの二点を指摘しておきたい。

『ユニヴァーサル・レビュー』が示したもうひとつの要求も、じきにかなえられることとなった。初版の刊行からおよそ一年後、一八六〇年五月に出版された第五版は、「よりコンパクトで安い版を」という要望にこたえるべく、「旅行者のナップサックやポケットに収まるような」[57]サイズ、すなわち「トラベラーズ・エディション」[58]として刊行されたのである。序文によれば、この版は、「AC会員のみならず、それ以外のアルプス旅行者からも、ナップサックやポケットにいれて携帯可能な版を望む声が頻繁によせられた」ことに着想を得、地図を残し挿絵を割愛することで「山岳高地を旅する探検家にとって使い勝手のよい旅行案内になる」[59]という発想のもとに編纂されたという。

「トラベラーズ・エディション」は、それまでの版とは三つの点で大きく異なっていた。第一点は、多色石版刷りの挿絵八枚が割愛されたことである。これは本の嵩減らしとコストダウンの両方の効果を狙った改変だろう。第二点目としては、第四版までは一六章に収録されていたラムゼイのスイスとウェールズの氷河に関する論考が割愛されたことが挙げられる。ラムゼイの論考は、スイスよりもウェールズ旅行者により役に立つという理由で、[60]別個に出版されることとなった。[61]三点目は、活字の組み方の変更である。第四版までは、一頁あたり三二行印刷されていたものが、第五版では一頁あたり四〇行に組まれており、一行あたりの文字数も多くなっている。このため、たとえば第四版までは三八頁を占めていたウィルスの登山報告は、第五版では二八頁へと、頁数が約四分の三に縮小されている。

こうした工夫により、第五版はサイズも厚みも値段もたしかに縮小された。「トラベラーズ・エディション」は、半革装、一六折り版三二八頁で、第四版までの「通常版」の三分の一以下の値段（五シリング六ペンス）で販売された。第五版は、まさしくサイズも値段もコンパクトな「ナップサック版」[62]となったのである。こうした工夫に背景に、PPG・1が示した好調な売れ行きは、[63]先述の書評同様、PPG・1がイギリスの読者層から肯定的な評価を受けていたことを示唆するものであった。それは、PPG・1の内容に対する社会的承認あるいは受容の証左と見なすことができる。

PPG・1は、イギリス社会に既に存在した本格的な登山をテーマとする「登山文学」に対する社会的関心の高まりのなかで刊行され、商業的見地からも成功したといえる。

また、PPG・1の成功が単発のものではなかったことは、三年後にPPG・2が、さらにその二年後にはACの機関誌『アルパイン・ジャーナル』がロングマン社から出版され、成功を収めたことからも明らかである。PPG・2は二巻本で、地図一四枚、挿絵五一枚を収録するクロス装幀で、値段は四二シリングと、PPG・1以上に高価な本であった。にもかかわらず、この本はやはり好評価を受け、商業的にも成功している。『アルパイン・ジャーナル』は、PPG・1やPPG・2とは異なり季刊誌として創刊され、会員だけでなく登山に関心を持つ一般読者が投稿可能な「質疑応答」欄を巻末に設けている。このことは、さらに広く一般読者を取り込む形で、コンスタントにACの活動を社会に向けて発信する試みと理解できるだろう。

ACによる出版物は、PPG・1以降、すべて一般読者向けに、大手出版社から刊行され、同時代の書評でもさかんに取り上げられ、実際によく売れた「登山文学」であったという点を、ここではとくに強調しておきたい。ここから、PPG・1の刊行は、たんなる登山愛好者集団による、一種の自己満足的な私的出版活動という以上のものであったことが明らかとなるからである。PPG・1は、AC初の刊行物として、たんなる「楽しい読み物」以上の役割を期待された本であった。

登山は、不特定多数の人々が見物し、その経験を共有することが不可能なスポーツであった。そうである以上、AC会員が実践する「登山」がどのような行為であるのか、それを人々にもっともリアルに伝える道具は、「当事者による語り」であった。一九世紀半ばの登山成立期における「登山文学」には、こうした「言説によるイメージ構築」と、それを通じた社会的承認の獲得という、きわめて社会性の高い機能が期待されていたのである。本稿が、ACによる出版物が有した社会的機能をとくに重視するのは、印刷物こそが、一九世紀半ばのイギリス社会における登山概念の構築とその社会的共有の鍵であったからなのだ。PPG・1に対する評価の高さは、そこで提示された「登山」像が社会的にたんに知覚されるだけでなく、承認を得ていたことを示唆している。しかし、そこには本当に意見の対立や批判はなかったのだろうか。そもそも、そこで提示された「登山」とは、いったいどのような行為として定義されていたのだろう。この点を明らかにするため、次節では、PPG・1を中心に、ACが提示した「登山」像とそれを

めぐる言説に注目してみたい。

第四節　「イギリス的資質の発露」としての登山

一八五〇年代から六〇年代半ばにいたる、いわゆるアルプス登山の「黄金時代」には、数多くの「登山を語ることば」が多様な出版メディアを通じて、積極的に社会に対して発信された。そのような言説の特徴の一つとして、登山を愛国心や人種的優越性を可視化する行為と見なすレトリックがあげられる。成立期のアルプス登山は、イギリス人のほぼ独占状態にあった。厳密にいえば、イギリス人は、技術的には現地ガイドに依存していたため、登山はイギリス人と現地ガイドの二者が合同で行なう行為であったのだが、彼らは対等な立場ではなかった。あくまでガイドは「雇われた」立場であり、主体的に登山を志し、実践するのはイギリス人であった。登山の語り手もイギリス人であり、語りのなかに表れるガイドは、登山者との対比において客体化された存在であったといえるだろう。「登山者＝イギリス人」という等式が無理なく受け入れられ、人々の意識に定着していったのは、このためである。「黄金時代」の登山をめぐる言説においては、この等式はあたかも所与のものであるかのように当然視されている。登山をイギリス人特有の資質の発露とする言説が成立し得たのは、この前提が無批判のうちに受容されていたからだろう。

ここで注目すべきは、そこで語られる「イギリス人特有の資質」とは、どのようなものであったのか、という問題である。アルプス登山や登山者のどこが「イギリス的」と見なされたのだろうか。この問いの解明は、そのまま一八五〇年代末に提示された登山概念や登山者アイデンティティの特徴を明らかにするものとなるだろう。このため、本節では、ＰＰＧ・１に対する書評に表れた「登山」や登山者のイメージにとくに注目してみたい。それらは、ＡＣがＰＰＧ・１を通じて発信した情報が、イギリス社会にいかに受け取られ解釈されたかを示すものだからである。

当時の人々にとって、一九世紀半ばの登山人気は、その時代の特徴的な現象と感じられるほどに顕著なものであった。たとえば、『ユニヴァーサル・レビュー』は、アルプス登山に対するイギリス人の情熱は非常に強く、また、そのような情熱の存在は周知の事実であるため、改めてそのことを指摘したり、こと細かに解説したりすることは不要

と述べている。[64] その人気ぶりは、実際にスイスに行けば目の当たりにすることができるが、仮に国内に留まっていたとしても、次々に出版される「アルプスの冒険や旅行についての描写」が喚起する関心の高さを示す証拠には事欠かない。[65] では、それほど強く人々を惹きつけた登山とは、どのような行為として理解されていたのだろうか。

『ブラックウッズ』によれば、イギリス人登山者とは、教育水準が高く、礼儀正しく、活力に溢れた人々であった。[66] たしかに、成立期の登山者はその圧倒的多数が高学歴で専門職に就く都市生活者であった。[67] その彼らが夏期休暇のたびにアルプスに向かったのは、そこに「登山」というこれまでにはない新しいタイプのスポーツの可能性を見出したからである。このスポーツの特徴として同誌が挙げたもののなかには、たとえば健康回復という要素が含まれていた。[68] 当時、アルプスで山に登って過ごす夏期休暇は、都会生活のストレスを発散し、心身を解放する理想的な方法と考えられていたのである。[69] ひとたび休暇としてアルプスを訪れると、故国では仕事に注ぐエネルギーを登山に向け、こうして得られた心身の健康をイギリスに持ち帰り、再び、己の本分たる職業に打ち込むというパターンの効用は、繰り返し語られている。[70] 休暇を通じた健康回復により、よりよき労働のための活力の再生産が期待されるという考え方は、登山者に特有のものではない。ヴィクトリア期のミドルクラスの間では、こうしたレジャー観は支配的であった。しかし、そうであるからといって、アルプスに行きさえすればよい、というものではない。ここが、登山者とその他の旅行者が分かたれる点である。彼らにとって、一九世紀中頃にアルプスで楽しまれていた他の余暇活動、すなわち通常の観光ルートをたどる旅行や徒歩旅行、風景鑑賞などは、登山の代替行為とはなりえなかった。この二者は本質的に異なるものだからである。その差異をもっとも強く感じさせる要素は、アルプス登山に付随する危険であった。

一九世紀半ばの言説において、登山行為に内在する危険は、アルプスにおける他の余暇活動と登山を峻別する要素とされていた。[71] こうした危険は、回避するのではなく、対峙し、克服すべき危険であった。とはいえ、人間の能力をはるかに越えた自然の脅威に対し、やみくもに挑戦することは、判断力の欠如以外のなにものでもない。[72] 登山行為における危険とは、その本質を見極め、それが克服可能かどうかを見定めたうえで、回避か挑戦かを選択すべきもので

ある。前者の場合は、回避を選択する判断力に、後者の場合は、危険の克服プロセスとそこで発揮される精神力に、それぞれ意味が見出されたのである。危険を克服した結果として達成される登頂は、そのため一層価値あるものとなった。

「危険」な余暇活動が社会的に否定されず、むしろ肯定された主な理由は、それがイギリス人の国民性というコンテクストの中で語られたことに求められる。王立地理学協会の会長講演（一八五九年五月二三日）において、ロデリック・マーチソンは、「出版されたばかりの、この素晴らしい本」とPPG・1に言及し、AC会員を「アルプスのもっとも標高が高く、近寄りがたい場所を探検し、その過程で得た知識を広く普及させるという、特別な目的のために全力を注ぐ」人々と呼び、このような「我々の同国人」が発揮する「困難な状況下における堅忍不抜さ」を賞賛した。[73] 同協会が、世界各地で展開される探検事業を積極的に支援する科学団体として、一九世紀中期以降、絶大な人気を誇っていた[74]ことを想起すると、その会長講演において、PPG・1やACがこのように表象されたことの社会的意味は大きい。

危険や困難にもかかわらず、人々をして探検や登山、他国への旅に駆り立てる「ある強い衝動」について、『ダブリン・レビュー』は次のように解説する。

> たしかに、こうした衝動を、イギリス人のみが独占しているというと、厳密には誤りになるだろう。その影響を知覚し、それに身を委ねる国民は他にも存在するからである。アメリカ人は、このような衝動を「かなりの程度」保有している。しかし、そもそも彼らは人種的には我々と同じなのだ。このため、彼らは、我々イギリス人と同じ性癖を授かっているのである。ドイツ人やフランス人も旅をすることはたしかだが、彼らの旅は、その活動範囲においても、そのインパクトの強さにおいても、我々の旅を弱々しく真似たものに過ぎない。[75]（強調は引用者）

アメリカ人を「人種的には我々と同じ」と位置づけ、ドイツ人、フランス人の旅行を「我々の旅」の模倣とし、オリジナルとは比較にならない複製品と見なすこのような語り口は、イギリス人と他国民とのコントラストを明確にし、

イギリス人の優越性を主張するためのものにほかならない。

『エディンバラ・レビュー』誌上においても、このような他国民との対比はあからさまに主張された。同誌によれば、イギリスの「教育を受けた青年たち」が、アルプスでは「ドイツ人、あるいはスイス人の科学的探検家のもっとも優れた者ですら尻込みするような大胆不敵な偉業をなしとげている」[76]という。危険や困難を克服し登頂を果たすことにより、イギリス人登山者は「他国で見られるような、教育によって植え付けられた集団的な勇気とは対照的な、イギリス人特有の、個々人に宿る活力と勇敢さ」[77]（強調は引用者）を体現する存在となるのだ。『ジオロジスト』も、「登山者（＝イギリス人）」の特質のひとつとして「勇敢さ」を指摘する。「手つかずの圧倒的な景観、あたかも自然が宝石箱に大切にしまい込んでいるかのような、すばらしい美の数々」を目の当たりにすることができるのは、「もっとも勇敢なものだけ」[78]であった。そして、この「もっとも勇敢なもの」こそ、イギリス人登山者なのである。

このように、一九世紀中葉のイギリスでは、登山報告書に示された困難を克服する勇気や克己心は、行為の主体者である登山者個人に還元されるのではなく、「イギリス人登山者」という集団的アイデンティティの重要な構成要素として位置づけられていた。登山文学において繰り返し語られる「危険とその克服」という構図は、登山をイギリス人の優越性を誇示する行為と見なす、このようなレトリックを強化するものであった。国民性との接合を主張する言説を通じて、この新しいスポーツは、ただの暇つぶしではなく「為すべき価値のある行為」という評価を確立していったのである。

これまで確認してきた言説から導き出される「登山」とは、心身の健康に役立ち、明日へのよりよい労働への活力を産み出し、さらには、イギリス人の優越性を可視化する行為であった。そのような登山への情熱の高まりを如実に示す例として、一九世紀半ばの複数の定期刊行物が異口同音に挙げるのは、一八五七年のACの設立であった。[79]登山者がイギリス人の優越性を可視化する存在であるならば、その登山者による団体は、どのように位置付けることが可能だろうか。「我が国の、もっとも経験豊かで、熱心な登山者」[80]により結成されたACは「アルプス登山の権威」[81]であり、その目的は「気高いもの」[82]とされた。ACは、趣味

を仲立ちとした私的な集団でありながら、同時に「登山者」という集団的アイデンティティの有り様を体現する存在であることから、「我々の同国人の優越性を示す強烈な例」[83]と見なされるにいたる。『チェインバーズ・ジャーナル』は、この問題について、他国では、そもそもACのような団体が結成されうるかどうか疑わしく、仮にそれが可能であったとしても、そうした団体がPPG・1のような優れた活動報告書を出版できたかどうか疑問である、という見解を表明する[84]。この見解が読者に対し説得力を持ち得たのは、ACの存在そのものを「イギリス的特質」と本質的に不可分のものとする認識が社会的に共有されていたからこそであった。

勇敢さや決断力に加え、イギリス人的なもうひとつの特徴として『フレイザーズ・マガジン』が挙げたのは、「身体運動好きな気質」であった[85]。「身体活動」については、次のような主張も見られる。『ブラックウッズ』掲載のPPG・1の書評において、評者のスウェインは、スポーツを「困難を伴う身体活動」と定義した。ここで言う「困難」とは、ある種の「不確定性」を内包するものであった。それは、たとえば狩猟のように、個々人に降りかかる危険や、目標の達成が必ずしも約束されているわけではないことから生じる「不確定性」をさす。登山においては、こうした様々な危険や困難は、たとえば登頂の断念や、事故や遭難をもたらす可能性として、つねに切実に意識される要素であった。危険を内包する「不確かな要素」を強い精神力と身体活動を通じて克服する行為をスポーツとするならば、登山こそ、まさにスポーツではないか。これがスウェインの主張であった。人は、人間の力を越えた圧倒的な自然のなかで様々な危険に直面する。こうした危険との対峙をものともせず、壮健な心身をたよりに山頂をめざしてこそイギリス人の真骨頂が発揮されるのだ。

一九世紀中頃のイギリスでは、アルプスでの初登頂者リストの独占や、世界初の山岳会設立、登山報告書の出版といった出来事は、いずれも、身体運動好き、野外活動好きで、なおかつ、強い精神力をもつイギリス人であればこそ実現可能な行為として理解され、イギリスの国民性との接合というコンテクストに照らして語られていた。このレトリックは、登山者が、登山文学という媒体を通じて一方的に社会に向かって主張していたのではない。こうした言説が、一般の定期刊行物に繰り返し出現していることに、と

くに注意を喚起したい。

ところで、人々が危険を内包する身体活動を通して「イギリス的」精神を発揮することを望んだとしても、なぜそれが他でもないアルプスで実践されなければならないのだろうか。山に登る必然性はどこから生じてくるのだろうか。このような問いに対しては、登山が持つ、もう一つの側面が答となるだろう。それは、「未踏の地」への情熱である。

この問題について、『アシニーアム』は、「前人未踏の地に到達したいという願望は、イギリス人の情熱となっている[86]」と述べている。前人未踏の地を求めて世界中に飛び出してゆく性癖をもつイギリス人の「一派」が、夏期休暇の格好の舞台として見出したのが、アルプスの高峰であり、世界の山々だったのである。[87] 山に向かう彼らの心に宿るのは、未知への挑戦を求める情熱であった。このため、彼らは、「ベルナー・オーバーラントやペナイン・アルプスの多くの峰に」その足跡をしるすだけではない。「世界のあらゆる場所で、この上なく困難な登攀や、未踏の大山脈の探検に挑み、成功を収め[88]」ていく存在なのである。こうしたイギリス人の情熱に鑑みれば、「ヒマラヤやアンデス山系の峰や峠について遠からず耳にする[89]」ことも、将来的にほぼ確実なことと考えられていた。

ここまで確認してきたように、一八五〇年代末頃のイギリス社会の共通認識によれば、登山は本質的に「イギリス的」であり、登山者は「イギリス人特有の資質」を体現する存在であった。この新しいスポーツは、ナショナリスティックな文脈に照らして理解され、その価値を判断されることで、積極的な評価を獲得していったのである。アルプス山中で発揮される「勇気」は、もはや個人レベルにおいてのみ語られるものではない。さらに大きなコンテクストへの接合が意識されているのである。登山において発揮される「個々のイギリス人に宿る折り紙つきの勇敢さ」、「真のアングロ＝サクソン魂[90]」は、「われわれの栄光を擁護するもの[91]」であるからこそ賞賛に値するのであり、そのような資質を体現するからこそ、登山は「新しいナショナル・スポーツへの渇仰[92]」を満たすものとして、語ることが可能となったのである。

このように、当時のイギリス社会においては、登山はその本質において、なによりもまず「イギリス的」な行為として認識されていた。強い精神力を基盤とし、野外活動やスポーツに対する情熱と前人未踏の探検にかける情熱の融

合こそが、登山の本質であると理解されたのである。そうであるからといって、この新しいスポーツが、日常と乖離したもの、荒唐無稽なものとなるわけではない。それは、あくまでも、まじめな職業人としての生活を根幹に据えた人生観から逸脱するものではなく、むしろ職業人としての義務や目標の追求に奉仕する役割を担っていた。勤勉に務めるものであればこそ、登山を十全に楽しむことができ、そこから活力を引き出すことが可能とされたのである。『フレイザーズ・マガジン』は、登山に打ち込むこうした人々を、「ジェントルマン・トラベラー」[93]（強調は引用者）と呼んだ。本節で検証した登山や登山者像が、イギリス社会において「リスペクタブルなもの」と見なされ、積極的な社会的承認を獲得していたことは、ここで改めて指摘するまでもないだろう。

第五節　批判と反論　―登山正当化のレトリック

高い評価が確認されるからといって、こうした登山概念や登山者像に対して、否定的な意見がまったく見られなかったわけではない。なかでも、美学的見地からの批判と、登山の無益性に対する批判は、成立期の登山者がなんとしても克服しなければならない問題であった。いずれも「登山」以前のイギリスにおけるアルプス認識の根幹をなす枠組みであり、一九世紀中頃においてもなお、強い文化的影響力を持っていたため、この問題を完全に無視することは不可能であった。そもそも、すでに確立した文化的・社会的価値観というコンテクストに登山を位置付けたいのであれば、こうした枠組みと対立、あるいはそれを否定することは得策ではなく、また、登山者たちもそのような感性の否定を望んでいたわけでもない。彼らにとって達成すべきことは、アルプスと人の関係を一元化することではなく、価値観の重層化を図ることなのである。そのためには、既にあるものを否定するのではなく、そこに新たな価値を付与するような正当化の論理が提示されなければならない。では、上記のような二つの批判と、それに対する登山者側の主張はどのようなものであったのだろうか。

美学的見地からの批判というのは、イギリス文化における「アルプス」の位置づけと深く関わるものであった。ロマン派の影響以降、イギリス人にとってアルプスとは「仰ぎ見るもの」であった。原則として、アルプスは麓から眺

め、その崇高美を鑑賞するという精神的な経験を求めて訪れる場所であった。ところが、一九世紀の半ばの登山者たちは、「眺め」るべき山によじ登ってしまう。これは、身体的な経験と言わざるをえない。たしかに国民性との結合や、心身の健康促進という側面に積極的な価値を認めることも可能だろう。しかし、そもそも、イギリス人とアルプスの紐帯となっていた美的感性が完全に捨て去られてよいのだろうか。山岳美や崇高美への畏敬の念が軽視され、未踏の地への欲求という競争原理が重視されすぎてはいまいか。登山者は自己中心的な視点に囚われすぎてはいまいか。[94]

たしかに、いわゆる登山文学には、「景色どころではない」といった主旨の記述が散見される。PPG・1の中からいくつか例をひろってみよう。ウィルスは、モンブラン山系のトゥール氷河、トリエント氷河、サレーナ氷河をたどりコル・デ・バルマからフェレット渓谷に至る行程のなかで、身も凍るような寒さの中でビバークした夜のことを書いている。あまりの寒さと「どうしようもないほどお腹が空いて眠るどころではなかった」[95]ため、ウィルスは焚き火で温めた石で暖を取りながら、「なにか楽しいこと」を考えることにする。心に浮かんだ様々なもののなかで、ウィルスにとって「もっともセンシュアルに感じられた」のは、翌日宿泊予定の「サン・ベルナール峠の宿坊の温かいベッド、そこで供される温かい食事やおいしいワイン」であった。[96]夜が更け、未明にさしかかるころ寒さがますますひどくなり、とにかく一刻も早く夜が明けてくれないものかと、ウィルスは考える。夜明けを待ち望む彼の気持ちには、日の出の崇高な美しさへの期待や憧憬などは微塵も感じられない。ウィルスの心を占めていたのは、より散文的かつ即物的なものであった。寒さで震えがとまらないような状況にあっては、「人はピクチャレスクなものをありがたがってはいられない」[97]からである。

ウィルスは身体的苦痛があまりに大きいと、人は風景鑑賞などに気が回らないという意見を述べているわけであるが、こうした見解を、W・マシューズも共有していた。ヴェランの頂上付近にたつマシューズは、「ナイフエッジ[98]に立ち、雪に突き刺した登山杖で身体を支えているようなときには、よっぽど特殊な気性の人間でなければ、風景鑑賞を楽しむことに気持ちがなかなか向かないものだ」[99]と感慨を述べている。同様に、時には崇高美より自分の身体の方

が切実な関心の対象となるものだと断言したのは、フレッチホルンに登頂したE・L・エイミスである。[100] 苦労の末に到着した頂上は「下から見上げた時には想像もつかなかったほど」[101] 狭く、エイミスら九人が立つのがやっとであった。東南北、いずれの側も切り立った崖になっており、人間が歩行可能な場所は、唯一、彼ら自身が登ってきた西側の尾根である。気温は氷点下で、そのうえ「身を切るような風」をさえぎるものもない山頂にあっては、「風景鑑賞の楽しみはなにかと影響を受けるもの」であるというのが、エイミスの見解であった。「つま先の凍傷は、時によっては自然の崇高美以上に切実な話題となる」のである。[102]

ウィルス、マシューズ、エイミスは、ともにアルプスと自然美、崇高美の関係を知らないわけではなく、登山中にそのことをすっかり失念しているわけでもない。そういったものの価値を認めていないわけでもない。彼らは、物理的に非常に厳しい条件下にあると、人はそうした観念的なことには気が回らないものだ、という経験則を語っているだけなのである。登山者による山岳美鑑賞の記述が皆無というわけではないが、それ以上に大きな比重を占めているのは、周囲の状況によって変化する自分の身体感覚や、達成感による気持ちの高揚であった。

このような傾向について、たとえば『ベントレーズ・クォータリー・レビュー』は、今や、美的感性という点ではドイツ人の方が我々より優っているかもしれない、と指摘する。[103] イギリス人にとって「山は、あらゆる知的で霊的な感性に訴えてくるような、高潔で純粋な喜びを与えてくれる寺院というよりは、ただの競技場（アリーナ）[104]」となってしまったようだ。イギリス人登山者は、受動的な行為（鑑賞）ではなく能動的な行為（登山）により強く惹かれるものらしい。[105]

こうした「登山」のありかたはイギリスにおける従来の「アルプス受容文化」からの逸脱ではないかという批判に対し、有効な反論を提供したのは、既に確認した登山をイギリス人の優位性の発露とするレトリックであった。美的感性の欠如は、アルプス受容文化の旧来の参照枠に照らした場合には、たしかに欠点となる。しかし、成立期の登山者が提示した登山は、そのような枠組みにのみ照らして理解されるべき行為ではない。自然美への関心を排除するわけではないが、それよりも優先的に見るべきものがあるのではないか。「登山」という行為に表わされた積極性に関する解釈は、イギリスの国民性やナショナル・プライドと

いう枠組みを新たな参照枠として設定すると、なんら否定的なものとはならないはずである。また、「これはスポーツだ」という主張は、アルプスを「競技場」に貶めたという批判に対して、有効な反論となる。登山がスポーツである限り、それが行なわれる場がある種の「競技場」となるのは、むしろ自然なことではないだろうか、というのが、登山擁護者の見解であった。

成立期の登山が直面したもう一つの主要な批判は、登山の「無益性」に対して向けられたものであった。こうした批判に対しては、次の三点を論拠として、「登山」は自らの存在理由を主張することが可能であった。まず、登山というものは、何らかの直接的な利益をもたらすために行なわれるのではない。しかし、その行為そのものに、健康促進やイギリス人の優越性の可視化、という重要な意味がある。次に、スポーツとは、そもそも「利益を求めて」行なうものではない。登山がスポーツであるならば、無益性を批判の対象とすることそのものが的はずれということになる。そして、なにより、登山は「無益」な行為などではない。PPG・1から独立して出版・販売された地図を想起すれば、登山擁護者の主張の骨子は容易に理解されるだろう。登山を通じて獲得される正確な地誌情報や、そうした情報を元に作成される正確な地図、実際の山容を写す挿絵、こうしたものは地理学という科学に貢献するものである。これでもなお、登山は「無益」というのだろうか。

このように、登山は、必ずしもイギリス社会に無批判に受容されていったわけではなかったが、一八五〇年代末のイギリスにおいては、PPG・1のような登山文学を通じて発信される「登山」概念は、「一般読者」層のなかで積極的に評価されていた。「スポーツとしての登山」という新しい「登山」認識は、一九世紀中期のイギリスで、たしかに社会的承認を獲得し、一般概念として共有されていたといえるだろう。

おわりに

登山は、一九世紀中頃にイギリスで成立した野外スポーツの一つとされている。しかし、この時期に人々が突然山に登り始めたわけではないことを想起すると、スポーツとしての「登山」の成立とは、実際にはどのような現象を指すのかが、改めて問われなければならないだろう。登山の

成立とは、なによりもまず、「山に登る」という行為についての人々の認識の変化によって確認されるべき現象なのである。一八五〇年代末のイギリスでは、「山に登って降りてくる」という行為を、それ以前には支配的であった「手段としての山登り」という認識枠組みから解き放ち、「スポーツ」という新しい枠組みに位置づけることにより、人々がその行為を「マウテニアリング」というスポーツとして認識するようになった。このプロセスこそが、「スポーツとしての登山の成立」として理解されるべきであり、一八五〇、六〇年代が登山の「成立期」とされるのは、こうした新しい「登山」認識の構築と共有が積極的に展開されたのが、他でもないこの時期だからなのだ。

上述のように、一八五〇年代末のイギリスにおける「登山」をめぐる様々な言説をみていくと、当時のイギリス社会における「登山」認識がどのようなものであったかが理解されるだろう。それは、なによりもまず、「イギリス人に特有の様々な資質」を可視化する野外スポーツとして認識されていたのである。こうした「スポーツ」としての登山概念の速やかな普及と強化を可能にしたのは、各種印刷物であった。一九世紀中頃のイギリスで「登山」概念の発信の中核となったのは、ACである。登山愛好者によって一八五七年に結成されたこの団体は、彼らが提唱する新しい登山概念を、印刷物を通じて広く社会に喧伝し、それに対する社会的承認を獲得していった。ACがPPG・1において提唱した、「スポーツとしての登山」や「イギリス人の優秀さを可視化する存在」としての登山者という集団的アイデンティティの一般概念化は、印刷物を通じて試みられたのである。

こうして創出された「登山」は、イギリス社会において、ジェントルマンにふさわしいリスペクタブルな新スポーツとしての文化的価値を獲得していく。しかし、そうであるからといって、登山に対する批判が一八五九年を境に消滅したわけではない。一八六〇年代にはいると、「登山」というスポーツの是非をめぐる議論が再び活性化されるのである。こうした議論は山岳遭難事故を契機として発生し、定期刊行物が賛否両論の意見応酬の主要な舞台となった。この議論の焦点となったのは、「危険」の要素をどう解釈するかという問題であった。一九世紀中葉の登山成立という現象を、登山認識の社会における共有と定着という観点から検討するのであれば、一八六〇年代の議論は、次に取

り上げられねばならない課題であるが、この問題の検討については他日を期したい。

注

（1）登山の成立については以下の文献を参照。Ronald Clark, *The Victorian Mountaineers* (London: Batsford, 1953); R.L.G. Irving, *A History of British Mountaineering* (London: Batsford, 1955); Fergus Fleming, *Killing Dragons: The History of British Mountaineering* (New York: Atlantic Monthly Press, 2000); Jim Ring, *How the English Made the Alps* (London: John Murray, 2000).

（2）T. Josias Simmler, *De Alpinus Commentarius* (Zurich, 1574). ジムラーについては、たとえば、Francis Gribble, *The Early Mountaineers* (London: T. Fisher Unwin, 1899), 63-68.を参照。

（3）Arnold Lunn, *The Century of Mountaineering* (London: George Allen & Unwin, 1957), 27-8.

（4）十八世紀末から十九世紀末までのモンブラン登山の歴史については Charles Edward Mathews, *The Annals of Mont Blanc: A Monograph* (London: T. Fisher Unwin, 1898)。M・ボーフォイのモンブラン登山については、以下も参照。*Ibid.*, 108-113.; Irving, *op.cit.*, 29-33; G.R.de Beer, *Alps and Men: Pages from Forgotten Diaries of Travellers and Tourists in Switzerland* (London: Edward Arnold & Co., 1932).

（5）一七世紀以降のイギリスにおける山岳観の変遷については、以下のニコルソンの名著は必読である。M・H・ニコルソン『暗い山と栄光の山　無限性の美学の展開』（小黒和子訳）クラテール叢書、国書刊行会、一九八九年。イギリス人の自然全体に対する観念については、以下の文献を参照。キース・トマス『人間と自然界：近代イギリスにおける自然観の変遷』（山内昶監訳）、法政大学出版局、一九八九年、アラン・コルバン『風景と人間』（小倉孝誠訳）、藤原書店、二〇〇二年、サイモン・シャーマ『風景と記憶』（高山宏他訳）、河出書房新社、二〇〇五年、大河内昌「崇高とピクチャレスク」、小森洋一他編『つくられた自然』（岩波講座文学7）岩波書店、二〇〇二年、一七五―一九四、アラン・ハウキンズ「ペットワースのターナー―農業改良と風景の政治学」（越智博美訳）、『つくられた自然』、一九五―二二五。ヴィクトリア時代の自然観については、U. C. Knoepflmacher and G. B. Tennyson (eds.), *Nature and the Victorian Imagination* (Berkeley, University of California Press, 1977) 参照（ただし、リン・メリルは、この論文集に博物学が取り上げられていないのは「欠陥」と指摘している。リン・L・メリル『博物学のロマンス』（大橋陽一他訳）、国文社、二〇〇四年、四二）

（6）先行研究におけるこうした問題については、拙稿「ヴィクトリア中期の登山と『科学』―『自己目的化』という指標

は妥当か—」、『歴史文化社会論講座紀要』三、二〇〇六年、八九—二〇〇、同、「モンブランの盛衰—興行師アルバート・スミスとヴィクトリア中期の登山—」、『歴史文化社会論講座紀要』四、二〇〇七年、六七—七八を参照。

(7) [George Carless Swayne] "Mountaineering — The Alpine Club", *Blackwood's Edinburgh Magazine*, (以下、*Blackwood's*) 86 (528), (Oct., 1859), 456.

(8) *Ibid.*, 456.

(9) John Ball, "Preface to the first edition", *Peaks, Passes and Glaciers* (以下、PPG), 1st ser, 3rd ed. (London: Longman, Green, Longman, and Roberts, 1859), ix.

(10) *Ibid.*, ix.

(11) 「文学」という言葉の使い方について、ここで確認しておきたい。本稿では、「アルプス文学」や「旅行文学」、「登山文学」という表現を用いるが、これは、それぞれ Alpine literature, travel literature/ writing の訳語である。この場合の「literature文学」は、「散文または韻文でかかれたもの」の意味であり、日本語の狭義の「文学」とは同義ではない。

(12) *Ibid.*, xii. 同様の指摘は同時代の複数の資料で確認される。たとえば、John Murray, *Handbook for Travellers in Switzerland*, 9th ed. (London: John Murray, 1861), xxix.

(13) Alfred Wills, *Wanderings among the High Alps* (London: Richrd Bentley, 1856).

(14) Thomas W. Hinchliff, *Summer Months among the Alps: with the Ascent of Monte Rosa* (London: Longman, Brown, Green, Longmans, & Roberts, 1857).

(15) "Alpine Travellers", *Bentley's Quarterly Review*, 2 (3) (Oct., 1859), 224.

(16) Clark, *Victorian Mountaineers*, 61.

(17) *Ibid.*, vi.

(18) "Recent Works suitable for Book-Societies", *The National Review*, 3 (5) (July, 1856), 252.

(19) Alfred Wills, *Wanderings among the High Alps*, 2nd ed., revised, (London: Richard Bentley, 1858)

(20) 十九世紀中葉のモンブラン登山人気については、拙稿「モンブランの盛衰」参照。

(21) "Alpine Literature", *Fraser's Magazine*, LX (August, 1859), 238.

(22) *Ibid.*, 238.

(23) Murray, *op.cit.*, xxix.

(24) Anon, *A Lady's Tour round Monte Rosa* (London: Longman, Brown, Greens, Longmans, and Roberts, 1859).

(25) Rev. S. W. King, *The Italian Valleys of the Pennine Alps: A Tour Through All the Romantic and Less-Frequented "Vals" of Northern Piedmont, from the Tarentaise to the Gries* (London: John Murray, 1858).

(26) Murray, *op.cit.*, xxix.

(27) A.Wills, "The Passage of the Fenerte de Salena ...", *PPG*, 1st

ser. (1859), chap.1.

(28) William Longman, "Modern Mountaineering and the History of the Alpine Club", *The Alpine Journal*, 8 (1876-78), 87.

(29) *PPG*, 1st ser. (1859), viv-xv.

(30) *Ibid.*, viv.

(31) *Ibid.*, viv.

(32) この問題については、拙稿「登山と科学」参照。

(33) イギリスの出版史については、John Feather, *A history of British publishing* (London: Routledge, 1988) を参照。ロングマン社、マレー社については、とくにchaps.10, 12, 13を参照のこと。

(34) たとえば、以下を参照。*Notes on Books: Being an Analysis of the Works published during each Quarter by Messers. Longman and Co.*, I (XVII), (May 31, 1860), 273-275.

(35) ミューディ貸本屋 Mudie's Select Libraryは、チャールズ・エドワード・ミューディが一八四二年にロンドンに創設した貸本屋である。イギリスにおける貸本屋は、もともとは保養地を中心とした地方都市で始まった業種であるが、一七四〇年前後にロンドンにも出現し、以後、ミドルクラスの、とくに女性を中心とした顧客に、家庭内でできる娯楽、すなわち読書を提供し続けた。

ミューディ貸本屋が創業間もなく成功を収めた理由は、それまでの貸本屋の経営方針を踏襲せず、次のような四点の新機軸を打ち出したことにある。第一に、新刊書をいち早く（人気の本は大量に）購入したこと。これにより読者は話題の新刊書を楽しむことができるようになった。第二に、購入する本の選択をミューディ自身が行ったこと（Mudie's *Select* Libraryという名称の由来はここにある）。きちんとした本のみを扱う高級な貸本屋という付加価値により、ミドルクラスの顧客は安心してミューディを利用できるようになった。第三に、年会費を一ギニーという破格の安値に設定したこと。従来の貸本屋の会費は四から一〇ギニーであったが、ミューディでは一ギニーの年会費で、一度に一冊、年に何回でも借り出すことができた。第四に、積極的な宣伝活動を展開したこと。従来の貸本屋は経費の点から宣伝活動にはあまり力を入れていなかったのに対し、ミューディは、新聞や雑誌に新着予定本のリストを掲載して宣伝に努めた。このほかにも、ミューディは、多少多めの会費を払った会員に対する貸本の宅配サービスや、貸本の役割を終えた本の割引価格での販売なども行なっていた。「古書販売」部門は、ミューディに大きな収益をもたらしている。

ミューディ貸本屋の巨大化は、扱う本、とくに商業的見地からの小説の支配などの問題を引き起こしたため、一九世紀の小説に与えた影響に関する分析的研究が進んでいる。イギリスの貸本屋については、清水一嘉『イギリスの貸本文化』図書出版社、一九九四年、同、『イギリス小説出版史』日本エディタースクール出版部、一九九四年を参照。とく

に、ミューディ貸本屋については、以下を参照。Guinevere L. Griest, "A Victorian Leviathan: Mudie's Select Library", *Nineteenth-Century Fiction*, 20 (2) (Sep., 1965), 103-126.; Guinevere L Griest, *Mudie's Circulating Library and the Victorian Novel* (Newton Abbot: David & Charles, 1970); Richard D. Altick, *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900* (Chicago: University Chicago Press, 1957), 124, 295-6, 312-3.

(36) 清水、『貸本文化』、……五。

(37) Charles Edward Mudie, *Catalogue of New and Standard Works, in Circulation at Mudie's Select Library*, (London: Charles Edward Mudie, January, 1860), 3.

(38) "Review and Notices of Books", *The London Lancet*, 2 (1859), 467.

(39) *Ibid.*, 467.

(40) "Art II", *The Dublin Review*, XLIX (Nov., 1860), 45.

(41) *Ibid.*, 45.

(42) *The London Lancet*, 2 (1859), 467.

(43) "Alpine Books and Alpine Travelling", *The Universal Review*, II (Aug., 1859), 190.

(44) *Ibid.*, 190.

(45) たとえば、以下を参照。*General List of Works, New Books and New Editions, published by Messrs. Longman, Green, Longman, Roberts, and Green, December 1862* (London: Dec., 1862) (頁番号なし。掲載書籍No.66として*PPG.1, PPG.2, Nineteen Maps of the Alpine Districts*が挙げられている。*Nineteen Maps*の書誌情報については、注五六); *General List of Works, New Books and New Editions, published by Messrs. Longman, Green, Longman, Roberts, and Green* (London: Aug., 1863), 11-12.

(46) *The Universal Review*, II (Aug., 1859), 191

(47) *The National Review*, 3 (5) (July, 1856), 252

(48) "*Peaks, Passes, and Glaciers: A Series of Excursions by Members of the Alpine Club*, (London: Longman and Co., 1859)", *The Geologist* (1859), 336.

(49) *Ibid.*, 340.

(50) "*Peaks, Passes, and Glaciers: A Series of Excursions by Members of the Alpine Club*, Second Edition, 1859", *The Medical Times and Gazette*, new ser., 19 (Oct. 1, 1859), 341.

(51) "The Climbing Club", *Chambers's Journal*, XII (July 23, 1859), 63.

(52) "Alpine Travellers", *Bentley's Quarterly Review*, 2 (3) (Oct., 1859), 224.

(53) *The Universal Review*, II (Aug., 1859), 200.

(54) この地図セットの販売が少なくとも一八五九年九月には始まっていたことは、以下の資料から確認される。*Notes and Queries*, 2nd ser., VIII (Sept. 6, 1859), 199.

(55) 「地図セット」の価格については、ロングマン社『峰、峰、

(56) *Nineteen Maps of the Alpine Districts: from the First and Second Series of Peaks, Passes, and Glaciers* (London: Longman, 1862)

(57) "Preface to the Present Edition", *PPG*,5th ed. (London: Longman, Green, Longman, & Roberts, 1860), viii.

(58) ロングマン社の広告で、第五版は「トラベラーズ・エディション」として紹介されている。たとえばラムゼイの『スイスおよびウェールズの氷河』(一八六〇年)巻末のロングマン社の広告を参照。

(59) *Ibid.*, viii.

(60) *Ibid.*, viii.

(61) A.C.Ramsay, *The Old Glaciers of Switzerland and North Wales* (London: Longman, Green, Longman, and Roberts, 1860).

(62) *PPG*, 1st. ser., 5th ed. (1859), viii.

(63) 『スペクテイター』によれば、一八六三年一月までに、『峰、峠、氷河』は三、三〇〇部の売り上げを記録したという。ただし、ここではこの販売部数が、第一輯のみ、あるいは第二輯(一八六二年刊行)のみの売上冊数なのか、もしくは第一、第二輯を併せた冊数なのかが明記されていない。*Spectator*, 36 (Jan. 3, 1863), 17.

(64) *The Universal Review*, II (Aug., 1859), 189.

(65) *Ibid.*, p.189.;"Alpine Literature", *Fraser's Magazine*, LX (July-Dec. 1859), 232.

(66) *Blackkwood's*, 86 (528), (October, 1859), 456.

(67) AC会員の社会階層およびその職種については、拙稿、「登山の成立とジェントルマン化意識」、『日本山岳文化学会論集』二、二〇〇四年、二一二三参照。

(68) *Ibid.*, 457.

(69) *Ibid.*, 457. 同様の意見は、同時代の多くの資料で確認される。たとえば、以下を参照。[Review of *PPG.1*], *The London Lancet*, 2 (1859), 467.; *The Medical Times and Gazette*, new ser., 19 (Oct. 1, 1859), 341.

(70) こうした態度の例として、John Tyndall, *Mountaineering in 1861* (London: Longman, Green, Longman, and Roberts, 1862), 5.を、ヴィクトリア期のイギリス人の健康志向とスポーツの関係については、Bruce Haley, The *Healthy Body and Victorian Culture*, (Cambridge,Mass.: Harvard University Press, 1978), chap.6 を参照。

(71) *Blackwood's*, 86 (528), (Oct., 1859), 456.; *The Universal Review*, II (Aug., 1859), 189.; *The Geologist* (1859), 336.

(72) Murray, *op.cit.*, xxxvi.

(73) "Sir Roderick I. Murchison's Address—Europe" *Proceedings of the Royal Geographical Society of London*, III (1859), 290-1.

(74) 十九世紀のイギリス社会と王立地理学協会の関係について

は、以下の文献を参照。Felix Driver, *Geography Militant: Cultures of Exploration and Empire* (Oxford: Blackwell, 2001). 地理学がとくにヨーロッパ社会でどのように発展してきたかをまとめた研究としては、D. R. Stoddart, *On Geography and Its History* (Oxford: Basil Blackwell, 1986) を参照。この時代のイギリスにおける探検事業は帝国主義的な政策と密接な結びつきを持つ一方、本節で考察するように、とくに地理学と深く関係していた。このため、とくに一九九〇年代以降、地理学と探検と帝国主義の関係を検証する研究が進んでいる。上記のドライバー同様、D・N・リヴィングストンはこうした地理学史の新しい研究動向の推進役となっている。David N. Livingstone, *The Geographical Tradition* (Oxford: Blackwell, 1992) は、こうした研究の基本文献である。言説を通じた人種観やジェンダーの構築と地理学の関係については、Anne Godlewska and Neil Smith (eds.), *Geography and Empire* (Oxford: Blackwell, 1994) のとくにPart III、地理学とヨーロッパ各国の帝国主義との関係を論じたものとしては、Robin Butlin and Michael Heffernan, *Geography and Imperialism 1820-1940* (Manchester: Manchester University Press, 1995) を参照。

(75) *The Dublin Review*, XLIX (1861), 41.

(76) "Alpine Travellers", *Edinburgh Review*, 104 (Oct., 1856), 440.

(77) *Ibid.*, 440.

(78) *The Geologist* (1859), 336.

(79) *Blackwood's*, 86 (528), (Oct., 1859), 458.

(80) *The Universal Review*, II (Aug., 1859), 189.

(81) *The Dublin Review*, XLIX (1861), 44.

(82) *Blackwood's*, 86 (528), (Oct., 1859), 458.

(83) *Chambers's Journal*, 12 (July 23, 1859), 63.

(84) *Ibid.*, 63.

(85) *Fraser's Magazine*, LX (Jul.-Dec., 1859), 232.

(86) *Athenaeum*, 33 (June 4, 1859), 738.

(87) *The Times* (Oct. 7, 1859), 9.

(88) *Bentley's Quarterly Review*, 2 (1859), 215-6.

(89) [Review of *PPG.1*] *Bookseller* (June 25, 1859), 1006-7.

(90) *The Times* (Oct. 7, 1859),9.

(91) *Ibid.*, 9.

(92) *Blackwood's*, 86 (528), (Oct., 1859), 456

(93) *Fraser's Magazine*, 213.

(94) *The Times*, (Oct. 7, 1859), 9.

(95) Wills, *PPG*, 1st ser. (1859), 30.

(96) *Ibid.*, 30.

(97) *Ibid.*, 30-1.

(98) ナイフエッジとは、尾根の幅が狭く、また両側の斜面が急峻に切れ落ちているような地形をさす。尾根幅が狭い、雪庇がある、積もった雪が不安定、あるいは強風にさらわれ

ている場合などは、ナイフエッジの歩行には、注意が必要である。

(99) W. Mathews, *PPG*, 1st ser. (1859), 82.

(100) W. L. Ames, *PPG*, 1st ser. (1859), 206-233.ちなみに、エイムズがこのとき対峙したのはフレッチホルンの三連ではなく、その隣のピークである。

(101) *Ibid.*, 218.

(102) *Ibid.*, 218-9.

(103) *Bentley's Quarterly Review*, 2 (3) (Oct., 1859), 216.

(104) *Ibid.*, 216.

(105) *Ibid.*, 216.